

◎インド総選挙ルポ 多数派ヒンズー v s 少数派イスラムの宗教対立、憎悪あおる政党

【MSN 産経ニュース、2014.4.12】

<http://sankei.jp.msn.com/world/news/140412/asi14041220410006-n1.htm>

【インド北部ムザファルナガル=岩田智雄】インド総選挙の投票が進む中、国内最多の有権者を抱える北部ウッタルプラデシュ州で、多数派ヒンズー教徒と少数派イスラム教徒の住民対立が顕在化している。宗教対立を利用しようと、各政党が暴力をあおっていると非難もある。11日には、選挙管理委員会が党幹部2人に「ヘイト・スピーチ」（憎悪に基づいた演説）の疑いで選挙活動への参加禁止を命じ、当局に告発する事態に発展した。



「あの日、近くの村で住民トラブルを話し合う会議があった。ヒンズー至上主義のインド人民党（BJP）幹部がイスラム教徒を攻撃する演説をして、ヒンズー教徒がイスラム教徒を襲い始めたんだ」

昨年9月7日にウッタルプラデシュ州ムザファルナガル近郊で起きた事件を、イスラム教徒のノミヌル・イスラムさん（71）はこう説明した。

息子（28）はヒンズー教徒に殺され、イスラム教徒居住区が放火と略奪に遭ったため、郊外に避難した。当初、5万人が自宅を追われ、今でも約2万5千人の避難民が9カ所でテントなどで生活する。

事件の発端は、イスラム教徒の男性が、ヒンズー教徒の男に妹が乱暴されたと主張、男を射殺したことだった。その後、男性はヒンズー教徒の集団暴行に遭って殺害された。以後、両教徒間の衝突が続いて計63人が死亡。犠牲者の多くはイスラム教徒だった。

インドでは人口約13億人のうち、ヒンズー教徒が約80%を占め、イスラム教徒は約13%にとどまる。

ムザファルナガルでは今なお、相手側が支持する政党が暴力をあおっていると非難の応酬を続けている。

▼「ヘイト・スピーチ」

ムザファルナガル・シャフプル地区の住民評議会会長のイスラム教徒、モハンマド・シャフナワズ・クレシ氏は「BJP幹部は『イスラム教徒はテロリストだ』『パキスタンの同調者だ』などと吹聴してヒンズー教徒に暴力をけしかけている。元は家族間の問題だったのに、共同体を二極化させた」と訴えた。

BJPは今年4日にも、党の首相候補として選挙運動を率いるナレンドラ・モディ氏の右腕とされる幹部、アミット・シャー氏が集会で「イスラム教徒に報復を」とヒンズー教徒らを

扇動。11日、選管に選挙運動禁止を命じられ、「ヘイト・スピーチ」の疑いで告発された。

クレシ氏はモディ氏について、「経済政策などで救世主のように言われているが、イスラム教徒には非常に嫌われている。2002年に起きた西部グジャラート州の虐殺事件を思い出せば、明らかだ」と話す。

この事件は、両教徒の住民が衝突し、ヒンズー教徒がイスラム教徒を虐殺したとされる暴動だ。死者は双方合わせて1千人とも2千人ともいわれる。当時から州政府の首相を務めているモディ氏は関与を否定したものの、イスラム教徒や欧米から虐殺を黙認したとの批判を受けている。

モディ氏が若いころ、極端なヒンズー至上主義を掲げる「民族義勇団」(RSS)のメンバーだったことも、イスラム教徒から嫌悪される要因となっている。

#### ▼終わらぬ住民の反目

一方、ヒンズー教徒側もイスラム教徒側への怒りを増幅させている。

ヒンズー教徒の住民チャンドビア・シンさん(36)は、昨年9月の衝突でイスラム教徒の発した銃弾を受けて負傷したという。

ムザファルナガルの選挙区で、BJPに対抗するのは、ウッタルプラデシュ州政権を握る地域政党、社会党(SP)などで、イスラム教徒の支持を受けている。シンさんは「BJPが暴動をあおっているというのは州政府のでっち上げだ」と反発する。

SP幹部、アザム・カーン氏はヒンズー教徒への憎悪をあおる発言を繰り返し、BJP幹部と同様、11日に選管の処分を受けた。

多民族、多宗教国家のインドではこれまでも、小さな事件をきっかけに多くの暴動や虐殺が起きてきた。

ムザファルナガルでは10日に総選挙の投票が実施された。開票は来月に行われるが、選挙が終わっても、住民間の反目は容易には解消しそうにない。



【インド総選挙】下院(定数545)の任期満了に伴い実施。有権者は8億人超。7日から5月12日まで10回に分けて投票される。開票は同16日。ウッタルプラデシュ州は有権者約1億3000万人で80議席を有する。国政最大野党、インド人民党(BJP)の首相候補で、グジャラート州首相のナレンドラ・モディ氏がウッタルプラデシュ州からの出馬を宣言。与党、国民会議派の選挙戦を率いるラフル・ガンジー副総裁も12日、同州から立候補した。

☆関連するキーワード：宗教対立、宗教的マイノリティ、ヘイト・スピーチ

# 一神教とは何か

宗教の起源から現代の一神教世界まで

## Overview

- 宗教の起源
- 一神教の誕生
- 一神教の文明論的系譜
- 一神教の人口分布
- 一神教の統一性と多様性
- 「一神教」概念の形成

## 宗教の起源

- 死者の葬送
- 死者からの影響を抑制するための「とむらい」
- 例：御霊信仰（祇園祭の起源）
- 宗教は危ない？
- 「宗教」(religion)とは何か？
- 特に一神教との関係（概念史）



## 一神教の誕生



- 古代世界において政治と宗教は未分化・一体
- 神権政治 (theocracy)
- 古代の国際政治における神々の役割
- 神(々)は元来、部族神
- 神々の「翻訳」「異文化交流」
- 契約は、双方によって承認された神々の前で神聖な誓いとして交わされた。

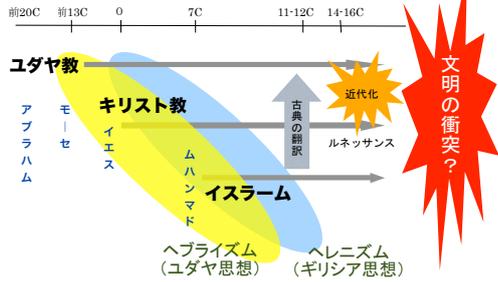


ウィリアム・ブーグロー  
『ヴィーナスの誕生』(1879年)  
オルセー美術館

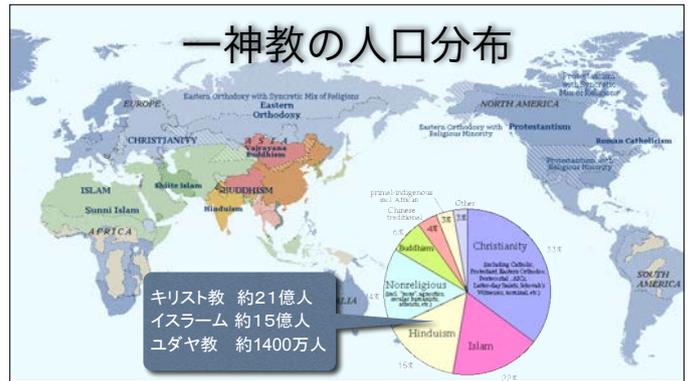
- エジプト・古代オリエント世界における「神の像」(god's image)としての王(支配者)
- 像=王の政治神学
- 一神教における偶像崇拜の禁止(否定)
- 神は表現することができない。政治神学の否定
- 「神」以外の何者も神としない (no other gods)。
- 一神教のこの神理解が「宗教」概念の起源の一つとなる(政治と宗教の分離)。



# 一神教の文明論的系譜



# 一神教の人口分布



# 一神教の統一性と多様性

- ユダヤ教、キリスト教、イスラームの**歴史的共通基盤**の認識
- アブラハム宗教 (**Abrahamic Religion**) としての自己理解
- それぞれの内部にある膨大な**多様性**の認識

# ユダヤ教



# キリスト教

## 西方キリスト教世界

- ローマ・カトリック教会
- ↓
- 英国国教会 (聖公会)
- プロテスタント教会
- ルター派 (ルーテル) 教会
- 改革派教会・長老派教会
- 会衆派教会
- バプテスト教会
- メソジスト教会、等々

## 東方キリスト教世界

- 東方正教会
- ギリシア正教会
- ブルガリア正教会
- ルーマニア正教会
- セルビア正教会
- ロシア正教会
- 日本正教会、等々

# イスラーム



## 「一神教」概念の形成

- 「一神教」(monotheism) は新しい概念
- 17世紀、ヘンリー・モアによる造語
- 世界の諸宗教における一神教の優位性の主張。西洋（キリスト教）文明の優位性の主張にもつながる。
- 17-18世紀、「一神教と多神教」の対比 (ex. David Hume)
- 19世紀、西洋でキリスト教の「ヘレニズム化」（脱セム化）、ユダヤ教・イスラームの「セム化」が進み、後の対立の種をまくことになる。（小原『宗教のポリティクス』p.47-51）